

04・薬の効果はまだ続いてるけど、庭でゆっくりおしゃべり

本編03『母乳体質になってしまったので、思いっきり授乳搾乳プレイでイカされる』から数日後。

とある年の晩秋。十八時ごろ。

場所は主人公とクロエが暮らす家の庭。

天気は晴れ。室温は十八度度。

長時間は厳しいが、少しくらいなら、外にいても問題ない気温である。

主人公、庭でベンチに座って、クロエの帰宅を待っている。

家の中で待っていればいいと言われそうなものだが、今日は待っていたい気分だったのだ。

SE1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0—10秒ほど流してSE2】

【その後、音量が小さくなる】

【ごく小さな音量で流す】

【場面転換するまで流し続ける】

SE2 クロエの足音1

【最初から最後まで流す】

【10メートルほど離れた位置から、だんだん近づいてきて、5メートルほどの距離で止まる】

するとそこへ、クロエが帰ってくる。

当然ながら、主人公を見て意外そうにしている。

▲ ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

● 正面 50センチ

【「少しキョトンとした様子で。」

家の中にいるだろうと思っていた主人公が、なぜか庭先にいるので」
ただいまー……」

〈主人公〉

「おかえりなさい！」

SE3 主人公が立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

主人公、立ち上がってクロエを出迎える。

家の外であまりはしゃぐのもどうかと思うが、最愛の恋人の帰宅が嬉しいのだ。

まあ、大目に見て頂きたい。

SE4 クロエの足音2

【最初から最後まで流す】

【5メートルほど離れた位置から、だんだん近づいてきて、1メートルほどの距離で止まる】

▲ ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

● 正面 50センチ

「少しキョトンとした様子で。

だが、嬉しそうに。

家の中にいるだろうと思っていた主人公が、なぜか庭先にいるので」
庭に居るの珍しいね。

もしかして、待っていてくれたの？」

〈主人公〉

「うん……♡ まあ、そういう事よ。

今のうちに庭も堪能しておきたかったし」

主人公が照れつつも認めると、クロエは嬉しそうにする。

そう、じきにこの庭の木も葉が落ち、庭どころかこの街すべてが冬景色となる。
今のこの風景を、今のうちに記憶に収めておきたいのである。

SE5 クロエの足音3

「最初から最後まで流す」

「1メートルほど離れた位置から、だんだん近づいてきて、50センチほどの距離で止まる」

● 正面 50センチ

「きゃっきやと嬉しそうに。」

主人公が待っていてくれた事が嬉しいので

え、嬉しい♪

【しみじみと。主人公の発言を受けて】

そうだよね……。もうすぐ寒くなるもんね。

この景色見るなら、今のうちって事か。

【少し声のトーンが上がって嬉しそうに】

じゃあ、あたしも。

せっかくだから、ちよつとゆっくりしてこうかな？」

SE 6 主人公とクロエがベンチに座る音

【最初から最後まで流す】

こうして主人公とクロエは、庭のベンチに並んで座る事となった。

クロエはこの通り、大抵の主人公の提案を前向きに受け止めてくれるのである。

主人公は頭をクロエに向けている。

なので、声の方向は正面のまま。

7秒ほど沈黙。

● 正面 50センチ

「しみじみと嬉しそうに。

クロエもまたこの庭の景色が好きなので」

はー……♡

ここ落ち着くよねえ……。

いつまでもいれる気がするもん。

たまにはこういうのもいいね。

「しかし、ふと気になって。

もう回復したとは思っているが、もしそうでないなら、この寒さは身体に障るので」

ところで……どう？ 体調は」

〈主人公〉

「もうすっかりいいわ！ 明日からは復帰しようと思ってる」

主人公、ふんふんと両腕を上下にさせてみたり左右に振ってみたりして、元気をアピールする。

クロエはそれを、微笑みながら見ている。

● 正面 50センチ

「【嬉しそうに、安心した様子で】

ほんと？ よかったあ。

うん。あたしも、そろそろ復帰してもいい頃合いだと思う。

【【少しだけコミカルに。】

深々と頭を下げながら話しているイメージで】

療養、お疲れ様でした」

〈主人公〉

「とんでもない。クロエこそ、本当にお疲れ様。色々面倒をかけてしまったわよね。

その節は本当にありがとう」

● 正面 50センチ

「【にこにこ】と嬉しそうに。

主人公の回復が喜ばしいので」

いえいえ♪

【少し間をあけてから。

※息づかいのみ※ で表現する。

ホッと落ち着いたようなため息】

はー……。

【しみじみと。

事故から今日までの出来事を振り返る】

事故からこの一週間、長いようで短かったよねえ……。

最初は不安だったけど、何事もなく回復してよかったよ」

〈主人公〉

「まったくだわ。一時はどうなる事かと思ったわよ」

● 正面 50センチ

「【にこにこ】と嬉しそうに。

主人公の回復が喜ばしいので」

とんでもない。あなたの幸せが、あたしの幸せですから♡
明日からはまた、元気な姿をみんなに見せてあげようね」

〈主人公〉

「もちろんよ！ 休んでた分を取り戻すべく、ばりばり労働させていたたくわ」

● 正面 50センチ

「【にこにこ】と嬉しそうに。」

主人公の回復が喜ばしいので」

うん、うん♪

もう、やる気一杯だね」

主人公とクロエ、並んで微笑み合う。

暖かで優しい空気が、庭に満ちる。

● 正面 50センチ

「【しみじみと】。

今度は、同居するようになってからの経緯を振り返る」

そうだ……長いようで短かったといえば。

ここに住むようになってからも、あつという間だったねえ」

〈主人公〉

「え？」

するとここで、クロエはふと過去の話始めた。

それ自体は全く構わないが、少々意外な展開ではある。

● 正面 50センチ

「しみじみと。」

今度は、同居するようになってからの経緯を振り返る。

今となつては笑い話だが、当時は大変だった事を振り返る」

覚えてる？

春頃さあ、あなた、国研（こくけん）で色々あつて。

新しい仕事、なかなか決まらなくて……」

〈主人公〉

「ああ……」

あったわねえ、そんな事。

その節も本当にお世話になったわね……」

わたし、あなたがいなかったら、一体どうなっていた事やら」

● 正面 50センチ

「しみじみと。

笑いつつ、引き続き今度は、同居するようになってからの経緯を振り返る。

今となっては笑い話だが、当時は大変だった事を振り返る」

あはっ。あの時は大変だったけど。

無理やりにも『一緒に住もう』って言って、よかったよ。

お陰で今もこうしていられるし。

あなたも今のお店で働けてるし」

〈主人公〉

「……………」

● 正面 50センチ

「少しトーンを落として。」

笑いつつも『情けない話だけど……』と言う感じで。

主人公は当然知っている事だろうが、改めてこの件を話す」

実は……あの頃さあ。

あたし、いつも人の目え気にして生きてたんだよね」

〈主人公〉

「え……？ えっと。そうだったの？」

主人公、この件については、もちろん知っている。

クロエがその実力や容姿に対し及び腰で、これまで様々なチャンス逃してきた事は、主人公にとっても長年の懸念事項だったからだ。

だが『そうだったわよね』という返答は、相槌として適さないような気がする。なので、ひとまず続きを促す。

● 正面 50センチ

「ちよっと自嘲して。」

クロエにとってこれは、失敗の時間なので。

そして補足するように当時の事を振り返っていく」
うん。

何するにも他の人に『何言われるか』『どう思われるか』そんな事ばかり考えてたの。

【少し間をあけてから。

穏やかに、でも実感をもって言う】

でもさあ、それで幸せになった事なんて別になかったんだよね。
って事に、あの頃気づいて……。

【少し間をあけてから。

少し明るいトーンになって。

自分を変えた結果、現在があるので】

だからね、やめたんだ。

これからはいつでも、自分のしたい事をしようって……。
それで、ついに好きって言って。

『あたしと居よう』って言えたの」

〈主人公〉

「クロエ……」

クロエ、ここでふと主人公の顔を覗き込む。
そのまま、顔を近づけてキスをした。

●正面 0センチ

「※※1回※※
キスする。」

軽く触れるだけのキス】

ちゅ。

【少し間をあけてから。】

穏やかに、でも嬉しそうに笑う】

ふふ♡

【穏やかに優しく、でも実感を込めて。

主人公を見つめながら話しているイメージで】

大好きだよ。

あたしの気持ちに応えてくれて。恋人になってくれて……ありがとう。

【※3回※】
キスする。

軽く触れるだけのキス。先程よりも甘い雰囲気】

ちゅ♡
ちゅっ♡
ちゅ…♡

【少し間をあけてから。】

ほっと溜息をつくような感じで。

穏やかに、でも嬉しそうに、実感を込めて言う」

あー……。好きだって言って、本当に良かった……。。

【※3回※ キスする。

軽く触れるだけのキス。先程よりも甘い雰囲気】

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

【※大きく息を吸って※ 話す。

主人公の匂いを嗅いでいるイメージ】

はー……。いい匂い。

あたし、あなたの匂い大好き。

【※大きく息を吸って※ 話す。

主人公の匂いを嗅いでいるイメージ】

すーっ……。はー……。すー……。♡

【※1回※ キスする。

軽く触れるだけのキス。先程よりも甘い雰囲気】

ちゅ♡

【優しく穏やかに】

大好きだよ♡」

〈主人公〉

「クロエ……♡」

言うと、クロエは少しだけ離れ、元の距離に戻る。

だが主人公は、この思わぬタイミングの告白に思わずときめいてしまって、なんだか体が熱くなってきた。

頃合いとしては、そろそろ家に入るべきだ。

もちろんそれはいい、それはいいのだが、ここで終わりたいくない事がある。それは……。

● 正面 30センチ

「【少し間をあけてから。

さらりと話題を切り替える。

あまり長い時間ここに居てもよくないので】

じゃあ、身体も冷えるしそろそろ……。」

〈主人公〉

「あっ……。」

えっと、クロエ、その……。」

● 正面 30センチ

「少しキョトンとした様子で。

主人公がまだ何か言いたげなので」
ん？」

〈主人公〉

「えっと……。」

主人公がももごと恥ずかしそうに見つめると、察しのいいクロエはもうそれですべてを理解したらしい。

嬉しそうににやにやとこちらを見ると、こう言った。

……さすがは、主人公の十年來の付き合いである。

● 正面 30センチ

「【穏やかに、でも嬉しそうにからかう。

主人公が何やらその気らしい事が嬉しいので」

えっ？ 何？

なんかむずむずしてきちゃったの？

薬の効果、実はまだ継続中？

あー。そもそも。

実は最初から。

早くあたしといちやいちやしたくて、外で待ってたって事？

……やらしー♥」

クロエ、『正面0センチ』のまま『無声音ささやき』をする。

●正面 0センチ 『無声音』ささやき ※マークのセリフまでささやく

「そつとささやく。」

甘くそつと、でも少し悪戯っぽくささやく」

いいよ……♥

家入って。思いつきりいちやいちや、しよう……♥」※

ここでフェードアウトして終了。